上座部仏教の安居修行
タイ国ワットパクナムで
現地報告

曹洞宗善光寺海外留学僧派遣育英会第一回生　梅田尚平

タイ国の上座部仏教における叢林生活を体験中の青年僧からワットパクナムでの雨安居修行についてのレポートが寄せられた。この青年僧は、大阪市南区上本町の浄土宗大念寺徒弟、梅田尚平氏。横浜市港南区日野町の曹洞宗善光寺住職黒田武志氏が創設した「善光寺海外留学僧派遣育英会」の第一回留学僧として修行中である。今年の雨安居は八月一日から十月二十八日まで。その期間をタイでは「パンサー」と呼んでいる。二十代の青年男子にとって、この期間をはさんでの三ヵ月間のパンサー修行は、一生のうちで最も大切な通過儀礼となっている。僧俗の区別が厳しく、出家主義をたてまえとしながら、その実は戒律上の問題に寛大？な日本の仏教と異なり、タイでは上座部の厳しい戒律を守りながら、一方で在家者の修行については出入り自由の寛容さをもっている。日本の青年僧の目にタイ・サンガはどう映ったか――。

梅田尚平（うめだ・しょうへい）氏　昭和三十一年福岡県に生まれる。五十七年佛教大学文学部仏教学科卒業。大阪・浄土宗大念寺住職大島行仙氏に師事、総本山知恩院で伝宗・伝戒道場成満。六十年に曹洞宗善光寺海外留学僧派遣育英会の第一回留学僧としてタイ国ワットパクナムに留学。

三ヵ月僧院で修行する慣習

タイでは仏教を国教と呼んだとしても決して誤りではない。国教という意味ではバンコク市内に王立寺院が百六十一存在しており、タイ国憲法第二十六条では、国民の信仰の自由は認めているが、国王

国王は仏教徒　憲法26条
保護発展へ予算も

は仏教徒でなければならず、かつ仏教の擁護者としてあるべきことが述べてある。そして国家が国家予算に仏教の保護発展の為の支出を計上していることからも明らかである。

実際、国民の九三・六％は仏教徒であり、タイの男子は二十歳になれば、個人の事情による時期の相違はあるが、一時的に出家得度し、おおよそ三ヵ月間僧院で修行する慣習がある。いわゆる風習のようなものであって強制や法律的義務ではない。

しかし、この入門修行の経験のない者は、官庁に就職する時や昇給、兵役義務の軽減などの考慮の際、不利なことがあるともいわれている。従ってこの国では、仏教は法の規定する以上に国民生活に大きな影響を与えていると思える。

南方上座部仏教の国では、僧は完全に出家し、社会生活から隔絶された僧院で仏道修行に専心している。その例外の行ないが、その国の宗教組織の骨組みを形造っているといえる。

入門修行の年齢は、普通は成年に達した二十歳からである。ワットパクナムの今年の新参比丘は百六十五人で平均年齢二十六歳弱、最高齢は四十八歳。また、未婚者は全体の八割を占める。三ヵ月間比丘として僧修行を卒えたのち、社会的にも一人前として認められた上で結婚するのが理想的な形となっているようで、一種の通過儀礼としての機能も果たしている。

入門の時期は限られてはいないが、おおむね、タイ暦のカオ・パンサー、すなわちタイの陰暦八月の新月の第一日（陽暦七月頃）に入り、オク・パンサーの陰暦十一月の満月の日（陽暦十月頃）に出ることになっている。今年のパンサーの入りは八月一日、オク・パンサーは十月二十八日であった。

おりしもこの三ヵ月間は、タイの降雨の季節でもあり、一日に一度は夕立が来る。したがって比丘は旅行をさけて禁足し、夜の外出も許されず、終日僧院に留まることになる。

午前四時には起床し、五時から指導僧による経典読誦の講習と朝課、朝食をはさんで休息ののち八時からパーリ語講習、仏典講義、仏教史、宗教儀礼等の勉学、十一時の昼食ののち二時から同じく教理学校へ赴き、休息をはさんで夕課、瞑想という過密スケジュールをこなしていかなければならない。

過半は真摯な入門動機

新参比丘にアンケート

一九八二年の文部省宗教局の統計年鑑によれば、タイの全仏教徒中、黄衣をまとう比丘の総数は二十七万四千五十八人で、青年男子の約二・七％。うちサーマネーン（沙弥、二十歳未満の見習僧）は十三万三千八百三人で、歴史的にみて、修行経験者は六十歳、七十歳代は九七％であるが、三、四十歳代は三〇％以下に下がっていて、年年若い人の入門が減少してきている傾向にあるといわれている。

私が九月二十五日にワットパクナムで、新参比丘（ピクナワカ）百六十五人に対して調査したアンケートの統計（回答は九十五人）からみると、新参比丘の四三％までが仏教について勉強したいと答え、そして両親に対する恩返し（両親に功徳を積ませる）のために三三％で入門修行の動機の上位となっている。

その他に、自分自身の信仰を得るため、結婚の前に修行しておく、習慣だから、修行した後の状態（将来の展望）が良好となるため、黄衣にあこがれて、等であった。

おもしろいと思ったのに、性欲の克服というのが九・七％ある。私の友人のピクナワカは現在奥さんが妊娠中で、その間の浮気封じのために修行させられているのだ、などと、冗談をとばしていた。

また、何故ワットパクナム寺院を選んで得度を受けたのか、という質問には、ワットパクナムは瞑想修行の寺として有名であること、その実践のための設備と教授陣の充実を挙げ、還俗後の在家信者となってからの宗教儀礼も併せて勉強できることなどが八一％を占めていた。加えて前住職チャオクン・プラ・モンコン・テープムニー師に対する尊敬の念が、彼らをこの寺へ向かわせたようである。職業別にみても、内務省に勤務するものが二〇％、銀行員や大学生、そして海軍や陸軍に所属するものが一般的に多く、三ヵ月間の有給休暇をフルに利用できる職種が有利であり、一般商店や販売業につくものは公的機関に勤めるものより不利。あるナワカは、僧修行のためにホテルのベーカリーを解雇され、それにもめげずひたすら修行に励んでいた。

教理学校でも四科目を履修

パンサーの期間は古参比丘から新参比丘に対する指導が行なわれ、仏教の教義が伝えられ、僧院内における集団生活と二百二十七の厳格な戒律遵守の実践には最適な機会となっている。

午前四時、廊下に鳴り響くベルの音で目がさめる。洗面と水浴ののち、黄衣を着用し、まだ明けやらぬ空に吹く涼しい風に打たれながら布薩堂へ向かう気分はすがすがしい。チャオアワット（住職）の戒律と僧としての生活上の訓示ののち、朝課（タムワットチャオ）があり、それから斎堂（Sala）で朝食をとる。この寺院では、斎堂で食事の供養を受けることは、すなわち托鉢と同じ意味にあたる。

二二七の戒律を実践
早起きし真剣な暗誦

朝食ののち供養者の為にプラパリット（phraparit、護呪経）を唱え祈念する。

八時からは教理学校でパーリ三蔵、戒律、仏教史、宗教儀礼の四科目にわたり、四人の教授陣によって講義が行なわれる。古参比丘達は同じくこの教理学校で、「ナクタム教理試験」の上級合格のために、また同じく「パリエン」といわれるパーリ語試験の昇段合格の為に、それぞれサーマネーンも交じって真剣に勉強、主に暗記に励んでいる。

十一時の昼食をはさんで午後二時からは同じく教理学校で勉強。入門修行の動機に仏教を勉強したいという答えが多かったように、総じて新参比丘の授業態度は熱心であり、予習、復習もよくやっているようである。

皆が起き出す前から一人座裡の廊下に出て、何やらパーリ語を繰り返し暗誦している者もある。昇級試験に合格しようとする為に真剣に努力している様子を見て、頭が下がる思いであった。

昇級に旺盛なサーマネーン達は、ひたすら暗記することに一生懸命なようで、翌日の日、廊下の隅で一人静かに唱んでいたサーマネーンの姿がとても印象に残っている。

午後五時からの夕課が始まる前には、必ず新参比丘と古参比丘がその日の戒律講義について互いに確認しあう儀式が行なわれる。

安居に入行を仏陀に誓う式

七月三十一日にアーサラハブーチャーといわれる初説法祭が行なわれた。この祭日は、入安居・カオ・パンサーが始まる前日に行なわれる祭典で、釈迦が悟りをひらいて六十日後、ベナレスのイシパタナ（Isipatana）の庭園で、五人の修行者に初めて法を説いたことを祝うもの。

この日、ワットパクナムでも、入安居に入る修行僧達のために日常生活用具（傘、石鹸、薬品、浴衣等）が多くの信者の方々から供養された。

八月一日は入安居・カオ・パンサー。この日パクナム寺院に所属している全比丘が、それぞれパンサー歴の順に布薩堂（ウポーサタ、uposatha）に集合し、全員出席が確認されたうえで今年の安居に入行することを仏陀に誓う式が行なわれた。

私は、この式に参列していて、アユタヤ様式の流れを汲むプラプッタループ（仏陀像）の端正な顔立ちと、視線をやや下に向けた眼差しから、近づくことの出来る非常な親しみを感じたことが印象に残っている。

タイを訪ねた黒田理事長を囲んで梅田（左）、田中両氏

中外日報　昭和60年12月11日より転載